2025年8月23日（土）

開演 15:00　（開場 14:30）

秋篠音楽堂

原作：小泉八雲
監修・講演：小泉　凡
脚本・朗読：佐野史郎
構成・音楽：山本恭司

翻　訳：池田雅之『新編 日本の面影』（角川ソフィア文庫）
　　平井呈一『怪談・骨董他』（恒文社）

主　催：秋篠音楽堂運営協議会
協　力：近鉄アート館／株式会社近鉄百貨店／NPO 法人奈良芸能文化協会
後　援：在日アイルランド商工会議所／島根県／松江市／奈良市／松江観光協会／小泉八雲記念館
　　NHK 奈良放送局／奈良新聞社／ならどっと FM

ごあいさつ　小泉　凡

本日は、小泉八雲朗読のしらべ「へるん先生傑作選」にご来場いただき、誠にありがとうございます。はじめての奈良での開催を大変嬉しく光栄に思っております。八雲は、1892（明治 25）年の夏、熊本からセツを伴って関西各地を旅し、奈良では「うを屋」（後の魚佐旅館）に泊まり、春日大社や東大寺を訪問しています。とくに「大仏を見たこと」「鹿に餌をやったこと」を親友・西田千太郎に手紙で報告しています。

さて、この企画は、ギリシャ生まれのアイルランド人作家・小泉八雲（ラフカディオ・ハーン/1850-1904）の作品世界を、松江出身の俳優・佐野史郎の朗読と、ギタリスト・山本恭司の音楽で楽しんでいただくパフォーマンスです。2007 年以来、さまざまなテーマで、国内外で 70 回以上公演を重ねています。それは、文学を社会にひらく新しい試みでもあります。

テーマにある「へるん」とは、松江赴任時の条約書に「ハーン」の名がそう記載されたことによります。以来、松江では「へるん先生」の愛称で親しまれてきました。今回の公演は八雲文学の真骨頂（しんこっちょう）が垣間見える、そんな作品で構成されています。作品に底流するテーマは、<生まれ変わり（循環的生命観）><母子愛><人工物にも宿る魂><境界や周縁への畏怖><耳と語り>など、八雲が怪談を通して人間世界に伝えようとした異界からの大切なメッセージです。

人間中心主義の考え方を嫌った八雲の一連の作品は、東洋と西洋、人と自然、生者と死者、現実世界と異界をつなぐ物語だといえます。それは、分断、対立、戦争という現代社会のなかにあって＜つながりの感覚＞を得ることができる文学です。

近年、八雲の怪談作品への世界的な注目がみられます。そして、「超自然の文学には一面の真理があるので、未来の人々も関心を持ち続ける」と予言した八雲の言葉が蘇ってくるのです。この秋には、八雲の妻・セツを主人公のモデルとする NHK 連続テレビ小説「ばけばけ」も始まります。

セツとともに紡いだ怪談文学の世界を、どうぞご堪能ください。

佐野 史郎
Shiro Sano

俳優。島根県松江市出身。
1975 年 劇団シェイクスピア・シアターの創立に参加。1980 年 劇団状況劇場（唐十郎主宰）へ入団。退団後 1986 年林海象監督「夢みるように眠りたい」で映画主演デビュー。1992 年テレビドラマ「ずっとあなたが好きだった」（TBS）のマザコン男 “冬彦” 役が社会現象となる。
1999 年 映画「カラオケ」で初監督。2006 年、植田正治の写真をモンタージュした映像作品「つゆのひとしずく」（DVD/2006 年 / 東映アニメーション）を監督。カン・ジェギュ監督「マイウェイ」（2004）、アレクサンドル・ソクーロフ監督「太陽」（2005）など海外作品にも出演。チェコのイジィ・バルタ監督によるラフカディオ・ハーン原作「雪女」（2014）では日本語版吹き替えに参加、プロデューサーとしても名を連ねる。
ギターの山本恭司とは松江南高校の同級生である。

山本 恭司
Kyoji Yamamoto

ミュージシャン。島根県松江市出身。
15 歳でギターをはじめ、18 歳でヤマハ・ネム音楽院に入学。その頃より天才ギタリストとしての呼び声高く、在学中に BOWWOW のリード・ギタリスト、リード・ボーカリストに抜擢される。
デビュー当時は、キッスやエアロスミスとのツアーが大きな話題を呼び、豪快で圧倒的なサウンドとギターテクニックにより常に日本のロック・シーンをリードしてきた。その後、VOW WOW を結成しロンドンをベースにヨーロッパ、アメリカで約 4 年間活動。イギリスでチャートインするなど海外での評価も高く、海外有名アーティストへの影響力も大きい。
バンド活動以外にも、ギター・インストゥルメンタル・アルバムのリリースやジャズ・フュージョン系ミュージシャンとのセッション、アコースティックの弾き語り、最近では俳優・佐野史郎との「朗読のしらべ」の音楽を担当するなど、他アーティストのプロデュースに至るまで、その幅広い音楽性を武器に世界の音楽シーンで活躍している。

小泉 凡
Bon Koizumi

東京都出身。
成城大学大学院で民俗学を専攻後、1987 年に松江へ赴任。妖怪、怪談を切り口に、文化資源を発掘し観光・文化創造に生かす実践研究や、小泉八雲の「オープン・マインド」を社会に活かすプロジェクトを世界のゆかりの地で展開する。俳優・佐野史郎、ミュージシャン・山本恭司との「朗読のしらべ」に参画。「2022 年度全国日本学士会アカデミア賞（文化・社会部門）」を受賞。主著に『民俗学者・小泉八雲』（恒文社、1995 年）、『怪談四代記―八雲のいたずら』（講談社、2014 年）『小泉八雲と妖怪』（玉川大学出版、2023）ほか。小泉八雲曾孫。日本ペンクラブ会員。
小泉八雲記念館館長・焼津小泉八雲記念館名誉館長・島根県立大学短期大学部名誉教授。

へるん先生傑作選

解説　佐野史郎

１　夏の日の夢／『東の国から』より

冒頭にご紹介する「夏の日の夢」は、おそらくへるんさん（小泉八雲～ラフカディオ・ハーン）の生まれたギリシャ、レフカダ島での、幼い頃の想い出を綴ったもの。

「その人」と言われる人は、母ローザ・カシマチに違いありません。へるんさんは、少年時代に父母と生き別れており、特に母への想いは生涯深かったようです。わくわくする話を聞かせ、美しい唄を唄ってくれた母のかすかな想い出は、へるんさんにとって最も大切な宝物だったことでしょう。

（平井呈一・訳）

２　勝五郎転生記／『仏の畑の落穂』より

生まれる前の記憶があった勝五郎という男の子のお話です。江戸の世、武蔵の国、多摩郡中野村と程窪が舞台。現在の八王子市東中野と日野市程久保にあたります。国学者の平田篤胤が残した記録にも残っている実話で、生まれ変わる前の男の子のお墓は高幡不動に、勝五郎のお墓も八王子の永林寺に今も残っています。

本当に不思議なお話ですが、現代ならばテレビのワイドショーで取り上げられるかもしれませんし、SNS ではフェイクニュースで片づけられてしまうかもしれません。情報に溢れた現代に生きていると、あらゆることに疑心暗鬼になってしまいがちですが、ここは素直に、勝五郎の話に耳を傾けてみませんか？

（池田雅之・訳）

３　水飴を買う女／『知られぬ日本の面影』より

小泉八雲は“へるんさん”と呼ばれて松江では親しまれていますが、その松江で出会った妻セツから数多くの怪談話を聞き、作品にしています。

これは、松江の大雄寺に実際に伝わるお話。葬られた母親から生まれた子供に、母は幽霊となって夜毎水飴を買いに現れます。

「母の愛は死よりも強い」と、へるんさんは幼い頃に生き別れた母への愛を募らせているかのようです。

（平井呈一・訳）

4　ちんちん小袴／『日本おとぎ話集』より

「ちりめん本」と呼ばれる、和紙を使って綴じられた、外国人向けのお土産用に作られた、日本のおとぎ話集の中からの一編。

立派なお侍さんのところに嫁いだお嫁さんは、良家の子女。ところがお嬢様育ちで、身の回りの事は、それまで全て奉公人がしてくれていたので、自分では何一つできません。

ある夜、小さな妖怪たちが現れます。お嫁さんは怯え、お侍の主人に助けを求めるのですが…その正体は!?妖怪が現れるのは、お嫁さんに原因があったようでした。

（池田雅之・訳）

5　むじな／『怪談』より

江戸の夜は、今の東京のように眩しいほど明るくはなく、闇に包まれていました。お屋敷が並ぶお堀端の坂で、家柄の良さそうな女性が一人、さめざめと泣いています。そこを通りかかった古老の商人が心配して声をかけました。ところが、なんと、その女性には顔がなかったのです!!

へるんさんは子供の頃、夏の間だけ家に滞在していた、敬虔なクリスチャンのジェーンという従姉の顔がなかったという記憶を記しています。病気で亡くなった従姉の幽霊を見たというのです。そのことを思い返していたのかもしれません。

（池田雅之・訳）

6　耳なし芳一／『怪談』より

壇ノ浦、赤間ケ関～下関が舞台の、源平合戦で敗れた平家の一門の亡霊が、琵琶法師としてその腕を買われ、阿弥陀寺に住み込んでいた盲目の芳一のもとに、合戦の語りを大君に聞かせよと現れる、へるんさんの代名詞ともいうべき『怪談』の中の代表作のひとつ。

和尚は、弟子に命じ、亡霊に取り憑かれぬよう、芳一の全身に経文を書かせるのですが、耳だけは書き忘れてしまいます。なぜ、いつの世にも争いが絶えないのか？そのことを忘れないよう、鎮魂の想いを抱きつつ、この作品と向きあいたいと思います。

（平井呈一・訳）

画像提供：小泉八雲記念館

小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）

Lafcadio Hearn

1850年、ギリシャのレフカダ島で生まれる。2歳で父の故郷アイルランドに渡るがその後両親は離婚。大叔母の養育のもと幼少期をアイルランドで過ごし、その後イギリスで教育を受ける。19歳のとき、単身アメリカに渡り新聞記者となる。1890年39歳で来日。島根県松江市で英語教師の職を得、その後熊本、神戸、東京と移り住んだ。神戸時代、日本に帰化して小泉八雲となる。東京帝国大学と早稲田大学で英文字を講じるかたわら、執筆活動も精力的に行った。1904年9月、54年の生涯に幕を閉じる。代表作に『知られぬ日本の面影』『怪談』など多数。